

「伝えるもの」から「受け継ぐもの」へ



札幌市立日新小学校

住所：札幌市中央区北8条西25丁目2-1

児童（児童数）：631人

私たちの学校では、進路探究学習における「深い学び」について、『地域の社会人・職業人が子どもへ『伝えていくもの』から、子ども自身が『受け継ぐもの』へと、自分のこととして、思いや願いが広がっていくこと』と捉えている。

そのため、子どもが自分のこととして感じられるよう、子どもが主体的に関わり、周りの人と積極的に対話する学習が重要であると考えている。こうした学びを進めていくためには、子ども自らが問いをもつことと、様々なことを試したり他の人の意見を聞いたりしながら学びを進める展開を教師が意識して進めていくことが前提であると考えている。



推進のポイント

〔地域を知る〕

地域における様々な活動や地域に存在するお店・企業を探し出すとともに、実際にお話を聞いたり、学校として事業の目的をお話したりして、できるだけ多くの回数、連絡をとっていくことが必要である。そのため、教師自身が“地域を知る”ことが何よりも重要であると考えている。

〔計画する〕

進路探究学習を学校全体のカリキュラムに位置付けており、各学年の取り組むべき内容が決まっている。その一方で、外部との連絡・調整などについては、各学年が行っているため、学年の実態に応じて、担任の思いや考え、教材化の柔軟性などを十分考慮しながら進めている。

〔校内体制を整える〕

本校の研究部会には、「進路探究学習部会」が存在しているため、今まで積み重ねてきた実践が蓄積され、次年度以降に生かされるように組織されている。

毎年、進路探究学習に係る校内授業研究も行われ、本校教員全員が研究討議に参加し、進路探究学習の在り方について共通理解している。

〔評価する〕

本校の進路探究学習は、総合的な学習の中に位置付けられ、総合的な学習の評価方法と同じような評価を行っている。子ども一人一人の変容が見えるように、毎時間の振り返りによる記録化を大切にし、次時につなげていけるような工夫改善を心掛けている。

〔次年度につなぐ〕

本校では、その学年が使用した教具や資料、作成したデータを蓄積していく取組を行っているため、年度が変わって、担任が代わっても、当該学年にふさわしい内容の授業が行えるようにしている。また、外部企業ともコンタクトを密にとっているため、新年度において新たに調整から苦勞することはない。

具体的な取組

◆自ら問いをもつことで主体的な学びに◆

【生活の中から生まれる問い】

子どもたちが生活の中ですでに見方・考え方をもっている事柄を取り上げ、その意味を探ることによって、



問いが生まれるように構成する。今まで気付かなかった価値に目を向けることで、より関心が高まり、さらに追究することで新たな見方・考え方へと変容する。こうした学びによって、自分の生活に新たな関わりをつくる力が育つと考える。

3年「ラジオ体操調べから地域のよさへ」より

夏休み前、町内で行われているラジオ体操の会場について調べたところ、「なぜ校区には、ラジオ体操会場がこんなに多いのだろう？」という疑問が生まれた。そこから、「どんな人が関わってくれているのか？」「ラジオ体操をするのに必要なことは何か？」などの問いが、子どもから生まれていった。

そこで、町内会長さんからお話を聞いたり、地域を取材したりする中で、お世話をしてくれる方の他にも、参加していない方々の理解や協力が必要であることや高齢化によりお世話をする方が不足していることなどに気付いていった。こうした学習を通し、次の活動目標が生まれると共に、みんなのために働くという見方・考え方が育っていった。



◆相手意識を高めて対話的学びに◆

【対話的学びの展開】

実践に当たっては、具体物に触れる活動や、創造的な体験活動を通して、子どもがその中から、これまでに無かった新たな価値を見出せるように構成している。子どもが、そこに関わる人たちの思いや願いを共感的に理解するとともに、自分のことを振り返られる活動を大切にする。特に繰り返し本物に触れ、関わ

ることができる環境を構成することで「もっとこうできないかな？」「どのようにするとできるのかな？」など必要感を伴った対話となっていく。

6年「ショップデザイン」より

地域にあるデザイン会社の協力を得て、ショップデザインの考え方や基本を学んだ。次に「グループで一つの作品をつくることに挑戦しよう！」と投げかける。「どんなショップがあるとよいか？」「どんなデザインにするか？」を話し合い、制作が始まる。ショップを経営する人にとってという相手意識、また全て評価されるという厳しさなど、子どもにとって日常の学習を超えて社会に向き合う第一歩となった。

模型を入れる枠や発想を豊かにするための材料は、デザイン会社から助言をいただき、できるだけ本物を用意した。「看板は一目で分かるように…」「落ち着いた空間にするにはどのような色がいいだろう？」など対話的な学びが続いた。

最後に、できた作品を評価し合う「プレゼン」の場を設定した。「聞いている人にこの言葉を残したいから…」「説明しながら動作をつけたほうが…」と相手を想定しながら工夫していった。「考えてはやってみて、また考える」ことを繰り返して対話する力を磨いていくことができた。

